

# 江戸時代の戯文にみる鼠害対策と鼠に対する動物観

安田容子

## 要 旨

江戸時代につくられた物語と戯文『鼠共口上書』を中心に、鼠が人へ願出る願文形式の戯文における、鼠害対策と鼠に対する動物観をよみといた。鼠の登場する物語や戯文には、江戸時代を通して、同時代の飢饉の状況が反映されている。また、18世紀後半以降の殺鼠剤の普及により、鼠害の表現がみられた。19世紀には、害虫を主人公とした同様の戯文もあるが、鼠に対しては、害虫とは異なり、害を及ぼす存在でありながら、富貴をもたらす存在としてみている。

キーワード：鼠 / 鼠害 / 戯文 / 江戸時代

## 1. はじめに

ネズミは衛生害獣、つまりペストコントロールの対象として認識されている動物である。ネズミと同様に、ゴキブリやカ、ハエなども、現在は各家庭で駆除の対象となる生物である。これらの害獣や害虫に対する防除は、江戸時代にも行われていた。カをくすべる方法は古代から行われ、シラミを除去する「しらみひも」も江戸時代には用いられていた<sup>1</sup>。江戸時代には、ハエやカは徹底して排除すべき衛生害虫ではなく、衛生害虫としてハエやカ蚊が意識されるようになったのは明治時代以降である<sup>2</sup>とされている。

ネズミは、江戸時代においては、ハエやカのような害虫と同様に、人の生活に害を及ぼす生き物であったが、一方では、ペットとしてかわいがられる存在でもあった。さらに、大黒天の使者として、福や富をもたらす象徴であり、また子孫繁栄の象徴でもあった。本研究では、鼠<sup>3</sup>に対する動物観について、特に江戸時代における害獣としての鼠に対する認識はどのようなものであったかということの問題とする。江戸時代には、鼠もまた、虫と同様に、現在のような衛生害獣とし意識してはいなかった。害獣としての鼠観がどのように変化していったのかということについて、特に、物語や言葉遊びの中で、鼠がどのようにとらえられていたのかということを読み解く。

本論では、特に鼠尽しの戯文を対象にすることで、江戸時代における鼠観の一端として、鼠害とその対策についての動物観を明らかにしていく。江戸時代後期につくられた戯文『鼠共口上書』<sup>4</sup>を中心とした戯文を対象とする。江戸時代前期のお伽草子など、鼠をと人とのやりとりを描いた物語作品も対象としながら、特に鼠に対する願文形式の戯文を対象に、人と鼠とのやりとりの中から、害獣としての鼠に対する動物観をみていく。



図1 葛飾北斎画『絵本早引』前篇「<sup>ネズミトリ</sup>鼠」(文化14年[1817]刊)

## 2. 江戸時代の鼠害

### 2-1. 江戸時代前期の鼠害と対策

鼠害や鼠害対策の表現は、室町時代後期から江戸時代前期に成立したお伽草子の中にもすでに見ることが出来る。鼠害を描いた作品には、当時の社会が反映されていることがある。例えば、鼠を描いた『猫の草紙』は、都市化によって増えすぎた鼠に対する対策を描いた作品として知られ、都市化の急速な進行による鼠害の問題が描かれた作品であると指摘されている<sup>5</sup>。また、室町時代末期に成立した『東勝寺鼠物語』における鼠の表現は、鼠害が甚大になったことにより、福神の使者であった鼠が害を及ぼすのみの存在としてみられるようになったことによるといわれている<sup>6</sup>。『東勝寺鼠物語』の文中には、「唯鼠の招く所、善を終する鼠は福を蒙る。悪を好鼠は災いを招くと云へる事、歴然也。」と、鼠に善悪の2種類があることが説明されている。

『鶏鼠物語』は、米の配分について鳥獣で争う内容であるが、寛永の飢饉とそれによる江戸から京都への廻米に取材したお伽草子である<sup>7</sup>。その冒頭において、鼠が集団で台所の食物を荒らす様子が描かれている。同様に、寛永の飢饉に取材した『薬師通夜物語』においても、鼠害と、飢饉時の鼠の様子が述べられている。『薬師通夜物語』は、『福斎物語』とも呼ばれる仮名草子である。寛永の飢饉が舞台であり、米価の高騰により困窮する人々について記されている<sup>8</sup>だけでなく、飢饉の実態とそれに対応する町組代表者たちの現実の姿を、異類のものたちを設定して語っている<sup>9</sup>とされる物語である。飢饉を描くことで、鼠と米との関係が強調されている。

これらの物語に共通してみられることは、鼠は、集団で器物や衣類に害を及ぼす対象として描かれていることである。江戸時代前期のお伽草子においては、鼠は談合を好むものとしてのイメージが普遍的に付されている<sup>10</sup>。また、都市化や飢饉が、これらの鼠を描いた物語作品の背景にある。

室町時代から江戸時代前期にかけて成立した物語には、鼠害について詳しく記されているが、一部の物語には、鼠害の対策についても記される。16世紀頃の書写とされるお伽草子『鼠の草紙絵巻』には、鼠は主に食器などの器物や衣類を損傷する存在として描かれるが、鼠を捕まえるためのさまざまな仕掛けが図示されている<sup>11</sup>。『鼠の草紙絵巻』に紹介される捕鼠専用の仕掛けは、江戸時代を通して用いられていた仕掛けである。

江戸時代後期に用いられた捕鼠の仕掛けは、一升枡を棒で支えて立て掛け、その下に餌を置き、



図2 『絵本加賀御伽』長堀 灘屋といふ石屋の大石  
 「猫いらずの薬の妙は賣とはや ねずみより先銭を取りり」

これに触ると枡が鼠の上に落ち被さるようにした「枡落とし」と呼ばれる、身近なものを使った簡易な仕掛け(図1)であった。身近な材料を用いた手軽ではあるが、効果のあまり期待できない仕掛けである。この仕掛けが用いられていた時期には、殺鼠剤が普及している。

## 2-2. 江戸時代の殺鼠剤

鼠害の対策には、枡わなのような捕鼠器を用いたりすることのほかに、殺鼠剤を用いることが18世紀後半以降には見られるようになる。殺鼠剤には、砒素や黄燐が用いられていた。砒素が鼠を殺すものであることは、『養鼠玉のかけはし』(安永5年[1776])に、「魚巴豆を食へは死す。鼠巴豆を食て肥と。今養鼠家。病鼠を済ふに。これらを考て薬をあたふべし。又鼠塩を食ひて身軽く。鼠霜をあたふれば。即死す。」とあり、鼠の飼養書にも紹介されている。

砒素は、18世紀後半以降、「石見銀山」の名称で知られるようになる。砒素を用いた殺鼠剤は、『俚言集覧』(明治33年[1900]刊)「鼠とり薬」において、「石見の銀山と云所より製して出すよし江戸に取次の家多く又小のほりをたてひさきありくものまゝあり」とあり、石見銀山でつくられたものとして知られていた。大田南畝『四方のあか』(天明7-8年[1787-88]頃)「鼠をせむる辞」<sup>12)</sup>は、鼠尽しの戯文である。朱肉を害する鼠に対する申し渡しの形式をとっている。脅しの言葉として、「夜もあけば猫にはめなんか、日がくれば落かけんか。地獄おとしか極楽おとしか。罪の軽重を枡おとしにはからば、」と様々な鼠とりの仕掛けを記している。最後の判決文は、「石見銀山一等をゆるし、鼠衣をはぎ、鼠算の過料をとり、壁の穴々、桁のすみずみ、のこらず追放するものなり。」と判決文の「罪一等をゆるし」を「石見銀山」に替えた表現がみられる。18世紀後半に登場した「石見銀山」は、効果的な鼠とりとして広く知られるようになり、物語にも登場するようになる。

### 2-3. 鼠取り薬売りの図像

「猫いらず」や「石見銀山」と呼ばれた殺鼠剤を行商する鼠取り薬売りを描いた図像の中でも古いものは、大坂で制作された狂歌絵本『絵本家賀御伽』<sup>13</sup>（宝暦2年 [1752] 刊）の挿絵に描かれた、行商の様子である。大坂、長堀の石屋を描いた場面において、「猫いらず鼠取」と書かれた幟を背負った行商が描かれている。（図2）

この姿の行商は、大坂だけでなく、江戸でも同様であった。喜田川守貞の『守貞謾稿』巻之六（生業下）に、「鼠取り薬」として、江戸と京阪における行商の様子が紹介されている。殺鼠剤の行商は、『絵本家賀御伽』に描かれた姿と同様に、幟を背負って薬の入った箱を持つ行商の姿（図3）である。同様の鼠取り薬売りの姿は、絵入狂句集にもみられ、「単とり幟かついで猫背中」（『新選画本柳樽』初編）や、「建立のやうな身でうる鼠取」（『誹風柳多留』七一編、文政2年 [1819] 刊）のように、鼠取り薬売りの行商の様子や格好を詠んだ句がある。



図3 『守貞謾稿』巻之六（生業下）「鼠取薬」の挿絵

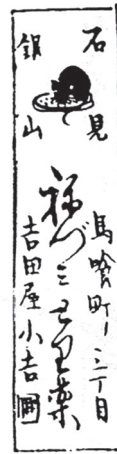


図4 同「江戸の幟」

## 3. 『鼠共口上書』と鼠害表現

### 3-1. 『鼠共口上書』と吉田屋小吉

東京都立図書館蔵の『鼠共口上書』は、四丁の小冊子であり、鼠にかかわる単語がちりばめられた鼠尽くしの戯文である。作者及び板元は不明であるが、大きさや丁数は、幕末に大量に販売された端唄本とはほぼ同じ設定である。また、「鼠共口上書」は本冊子の原題ではなく、新しく付けられた表紙の題簽に書き記された題である。小冊子の絵表紙にある題は、「銀山御薬種より鼠共へ御申出之事 并ニ鼠なかまより願出る事」である。内容は、石見銀山の製薬所から鼠への申出書と、鼠からの願出書からなっている。

同じ内容で、表紙の絵と細部の表現が異なる「銀山御薬種より鼠共へ申出之事并に鼠仲間より願ひ出る事」があり、大坂道頓堀日本橋詰東江入南側にある本屋安兵衛（松栄堂）との関係が指摘さ

れている<sup>14</sup>。本屋安兵衛は、唄本や浄瑠璃本を扱うほかにも、出版・卸から古本販売など手広く商売を行っていた大坂の絵草紙屋である。本の小本化をはかり、その中でおどけ落ばなしや口合もんくが使われていた。そのような中でこの小冊子が作られたとされている。

本屋安兵衛の板による『大寄噺の尻馬』初編（刊行年不明）には、『鼠共口上書』と同様の形式の戯文「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事並に虫三ヶ仲間より洗濯所江頼出る事」が入っている。

『大寄噺の尻馬』は、本屋安兵衛が、以前から売りだしていた2丁から4丁の小冊子の落咄などの滑稽ものについて、自店で出したものだけでなく、他店のものを加えて寄集めたものに、新たに表紙、口絵、目次を付して刊行したものである。半紙本三編三冊と小本六編六冊の合計九編九冊からなり、これらの諸編のいずれもが刊記を持たず、正確な刊行は不明である<sup>15</sup>。また、本屋安兵衛が出版した『世帯平記雑具合戦』と同趣で内容の一部が異なるものが複数の板元から出版されるほどの評判を得、その板元の中には江戸の吉田屋小吉も含まれていることが明らかにされている<sup>16</sup>。

江戸の吉田屋小吉は、大坂の本屋安兵衛と同様に、幕末に大量の唄本を発行した、江戸の唄本屋である。読売りによって唄本を売り歩いたほか、店でも販売していた<sup>17</sup>。吉田屋は、文政年間以降、流行唄の唄本などを発行していた絵草紙屋であり、江戸馬喰町三丁目に店を持っていた。どのような店であったか、その様子は不明であるが、くどき節など、薄い唄本や瓦版の出版を行っていた本屋であった<sup>18</sup>。吉田屋の扱っていた冊子は田舎土産として大に行なわれたとされる<sup>19</sup>。また、これらの読売り販売以外には、仙女香などの取次ぎを行っていたことが、唄本の表紙から知られている<sup>20</sup>。吉田屋は、唄本屋であると同時に殺鼠剤、石見銀山鼠取り薬の行商と取次ぎを行っており、特に石見銀山鼠取り薬は、馬喰町の鼠取り薬として有名であった。『守貞漫稿』巻五「生業」の中に、鼠取り薬売りについて記すが、その挿絵に描かれた行商が背負っている幟には、「馬喰町三丁目 吉田屋小吉」（図4）とあり、馬喰町の吉田屋が薬の販売を行なっていることがみえる。19世紀になると、鼠取り薬売りは馬喰町からの行商として知られていたといえる。また、絵入り狂句本の『誹諧種ふくべ』八集（天保15年〔1844〕刊）には、「馬喰町いたづらもの名所なり」と馬喰町の鼠取り薬売りを詠んだ狂句があり、馬喰町の鼠取り薬売りの店が描かれている（図5）。吉田屋が、殺鼠剤についても行商だけでなく、仙女香などと同様に店においても販売していた可能性を示している。鼠害について記した小冊子『鼠共口上書』は、発行者が不明であるが、本屋安兵衛や、吉田屋小吉のような本屋から刊行されたと考えられる。吉田屋小吉は殺鼠剤の取り次ぎも行っていたことから、吉田屋の殺鼠剤販売の広告として摺られた冊子であったと考えられる。

### 3-2. 害虫を題材にした願文形式の戯文

『鼠共口上書』のような、願文形式の戯文は、鼠だけでなく、鼠同様に害を及ぼしていた蚤・鼠・蚊を扱ったものや、野菜や魚を扱ったものがある。本屋安兵衛板の『大寄噺の尻馬』においても、初編に害虫を扱った「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事並に虫三ヶ仲間より洗濯所江頼出る事」が入っているほかに、三編に台所を舞台にした魚の口上書と野菜の口上書が入っている。魚たちの願文をのせる「板もと台所御料理人様江奉願上候魚仲間より 返答書」と、青物を取上げた「青



図5 『誹諧種ふくべ』八集（天保15年〔1844〕刊）  
 【狂言】馬喰町いたつらもの、名所なり 西ノ米房

物仲間ども台所板元役所江御願上口上書」である。台所を舞台にしたこの2編は対になっており、野菜と魚類が台所における互いの立場を主張するものであるため、『鼠共口上書』とは趣を異にする。その一方で、害虫たちの訴えについての「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事並ニ虫三ヶ仲間より洗濯所江頼出る事」は、洗濯所からの申渡と、3種類の虫からの願出からなっており、『鼠共口上書』と同一の形式である。鼠と同様に人の生活に害を及ぼすものとして意識されていた蚤、虱、蚊をあつかった戯文である。

『大寄噺の尻馬』中の「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事并に虫三ヶ仲間より洗濯所江頼出る事」には、内容を同じくしながら、その表現に多少の相違がみられる類本が存在する。浜松歌国編著、天保4年〔1833〕成立の『撰陽奇観』巻之四十一には、「新板おどけ洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事并ニ蚤虱蚊のねがひ書」<sup>21</sup>という題で、『大寄噺の尻馬』の戯文と同一の内容の戯文がある。続帝国文庫には、『蚤虱蚊狂言』として、表現の一部が相違したものが入っている。『小浜市史』に紹介される、「慶応三年卯二月十三日若州遠敷郡三分市村 小畑佐左衛門所持」とある写本「虫三ヶ仲間証文帳」をはじめ、19世紀に作られた写本も多く残っている<sup>22</sup>。

「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事并に虫三ヶ仲間より洗濯所江頼出る事」は、蚤、虱、蚊による、人の生活への被害の状況と、これらの虫害に対する対策を記した小冊子である。虫害対策として、当時新しく売り出された防虫効果のあるうこん染めや、蚤取り、「うせひも」と呼ばれる虱除けの布などが挙げられている。類本を含む、これらの戯文に共通していることは、害虫の被害とその対策方法について具体的に紹介していることである。虫たちの言い分には、近頃の状況についての苦情がみられる。虱は今までは貴人はうこん染を着ているため、一切近寄らず、下々にばかり取り付いていたのが、「近頃はうせひもと申す水かねのどく薬を以て、六十日が間われわれ子孫

のねをたち候事、甚なんしうに候」と水銀を用いた「うせひも」に対する苦情を述べている。また、蚊は、「近頃所々の藪にしねんかうと申す病はやり、住家なき故白中にも小くらき所を考、うへをしのぎ申候」と、藪に病気がはやっていることや、蚊くすべに対する苦情をのべる。はっきりした制作年は不明であるが、これらの対処法が行われるようになってからの制作といえる。蚤や虱、蚊の害に取材したこの戯文は、動物に託して人を見ることで楽しむものともいえるが、人の体に損傷を与える虫に対して厄介者という意識があり、それを笑う戯文である。実際に効果的な防虫対策がなされるようになったことが、背景にあったと考えられる。

『大寄噺の尻馬』、『摂陽奇観』中の戯文には、蚊の言い分に、「近年京田舎の片ほり、八瀬や小原の女商人、むろの蚊くすべいらんかにやと賣あるき」とあり、上方を舞台としているとみられるが、続帝国文庫の『蚤虱蚊狂言』には、「近来御城下町々にてはかやの木おがくず等をあまた売あるき候」と、江戸が舞台であるような描写である。<sup>23</sup>大坂と江戸においてその表現を変えたと考えられる表現がみられる。大坂を舞台にした板と江戸を舞台にした板が存在していたといえる。また、「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事并に蚤虱蚊のねがひ書」には、特に19世紀の写本が多く存在することからも、19世紀以降には広く知られた小冊子であったと考えられる。

### 3-3. 『鼠共口上書』における鼠の表現

『鼠共口上書』は、「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事并に虫三ヶ仲間より洗濯所江頼出る事」と同様に、類本の存在する小冊子である。小谷氏架蔵の「銀山御薬種より鼠共へ御申出之事并に鼠仲間より願ひ出る事」は、東京都立図書館蔵の『鼠共口上書』は、内容はほとんど同一であるが、細部の表現に異なる部分がみられる。特に、表紙の絵は大きく異なる。小谷本は、「上部に申出書を読みあげる袴姿の人、板縁に畏まる二疋の猫（羽織姿）、御白州に控える三疋の鼠（羽織姿）を描き、上に『銀山御薬種より鼠共へ御申出之事并に鼠仲間より願ひ出る事』、右上の旗に『いたづらもの』『製薬種』と書く。」<sup>24</sup>ものであるが、都立図書館本には、2匹の猫や、薬売りの旗は描かれない。その代わりに、鏡餅と唐辛子、魚の骨のようなものが描かれた幕が上部に描かれている（図6）。鏡餅と唐辛子は19世紀の鼠の戯画にも描かれる<sup>25</sup>ように鼠と関係のあるものとして意識されていた。また、申出書を読み上げるのは、袴姿ではなく、羽織姿の人となっている。

『鼠共口上書』の内容からは、当時の鼠害の様子がうかがえる。登場する鼠は、「どぶ鼠」、「鼠」、「野鼠」である。表紙にも3匹の鼠が描かれており、これに相当している。紋は白抜きになっており、紋からどの鼠が相当するのかわからないが、着物の柄をみると、左の鼠の着物は草模様の柄であることから野鼠を指していると考えられる。中央の鼠の着物は溝の流れかボウフラを表しているような柄であり、どぶ鼠を指している。右の黒羽織を着た鼠が、鼠を表しているようである。

どぶ鼠は食物に対する害、鼠は屋根裏の器物や衣類、蔵の中の穀物に対する害、野鼠は畑の作物に対する害を及ぼす存在として描かれている。どぶ鼠とそれ以外の鼠、野鼠が、その住み処や害においても区別されている。特に、家の中での害について、溝に棲み、台所の食物を害する鼠はどぶ鼠とし、屋根裏に棲み、衣類や書類を害する鼠は鼠としている。19世紀には、鼠とどぶ鼠のよう



図6 『鼠共口上書』 絵表紙  
 銀山御葉種ノ鼠共へ御申出之事 并ニ鼠なかまノ願出る事

に、物語の表現においては、鼠の住む場所によって、鼠の性質が異なるものとして認識していた<sup>26</sup>。『鼠共口上書』においても、ドブネズミとクマネズミの2種類の区別を行っていたとはいいがたいが、家の中で害を及ぼす鼠には異なる種類があることが認識されている。また、これらの鼠とは別に、人に害を及ぼさない鼠として、こま鼠やなんきん鼠が登場する。この鼠は、芸をすることで子供たちを喜ばせる存在として描かれており、どぶ鼠などの害を及ぼす鼠とは区別されて描かれ、申渡の対象とはなっていない。(資料1)

#### 資料1 『鼠共口上書』

向後かたく相慎み、いたつらをやめ、こま鼠なんきん鼠のごとくげいとうをおぼへ、子供のきけんをとり手遊びにも相成においては、思召をもつて御扶持米を被下置候間、仲間の者共へ早々申し聞べく候。若違輩の者有之においては、ねこぶち三色之丞、いたちさいご兵衛に申付、枡落し、あるひは石見銀山の葉ほうをもつて、みなごろしにいたすべきもの也

こま鼠、なんきん鼠のどちらも19世紀の子供向けの草双紙において、小さい鼠として登場し、愛玩動物として子供の遊びものでもあった鼠の品種である。愛玩動物となっている鼠は、子供のもてあそび品として、害を及ぼす鼠とは異なる存在としてみられている。人に害を及ぼす鼠と、害を及ぼさない愛玩用の鼠に分けて描き、どぶ鼠や鼠に害獣としてのイメージを付すことは、18世紀後半以降の黄表紙などの物語においてみられた考えである<sup>27</sup>。『鼠共口上書』の申渡の文中に、どぶ鼠や鼠が悪さをやめて芸を覚えて子供の遊びものになるのなら、扶持を与えるという部分がある。(資料1) 愛玩用の鼠と、害を及ぼす鼠が区別されているが、両者は同じ鼠であるとして、害を及ぼす



鼠が愛玩用の鼠になり得ると考えられていた。特に飼育愛玩の対象となる鼠に対しては、同じ鼠という意識を持ちながら、害を及ぼす存在ではなく、富貴をもたらす存在としてとらえられていた。

また、鼠からの願書のなかに、献上品とともに、福鼠となって人に富貴をもたらすことを約束している。(資料2)同様の表現は、害虫の願書にもみられる。(資料3)

#### 資料2 『鼠共口上書』

犬鶏の通り、少々にてても扶持米を被下置候へば、以後はわるいたづら仕らず候、もつとも福鼠となって、よき事をまねぎ可申候あいだ、なにとぞ、ますわな、ちごく落井にははみぎん山ねづみ根たやし葉御さしとめ被下置候は、めうがのため、薩摩の名物鼠の塩から、しつはらいねつみの付つき、献上仕り候間、右之段御聞と、け可被下候様奉願上候

#### 資料3 「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出之事并に虫三ヶ仲間より洗濯所江頼出る事」

三ヶ仲間之者共被仰渡候趣、かたく相守り申候間、何卒むろの蚊くすべ取もちうせひも右三品を御差留被仰付候は、冥加之為、蚊がしら千本虱のかは五百枚蚤のきん玉五十斤、并に割斧二挺毎年無遅滞奉差上候間、右之段御聞届被下候は、難有奉存候以上

両者の献上品は、どちらも望ましい品ではないが、もし犬や鶏と同様に餌(扶持)を与えられるのなら、人のものを損なうことなく、福鼠となって人に富貴をもたらすと約束することは、虫たちの願書には見られなかった表現である。害虫とは異なり、鼠は害を及ぼす存在で有ると同時に、富貴をもたらす存在にもなり得るという認識であったことの表現である。害をおよぼす鼠と富貴をもたらす鼠は必ずしも別種のものとしてみられていたとはいえない。鼠は、害のみを及ぼす存在ではないと考えられていたことを示している。人に害を及ぼす存在であっても、鼠に対する意識は、害虫に対するそれとは異なり、鼠には富貴をもたらす存在としてのイメージも付されていた。

### 3-4. 物語と戯文にみる飢饉と鼠

『鼠共口上書』の鼠たちの訴えには、飢饉により鼠の食べる食物が少なくなったこと、そのため人の物を損じるようになったことが挙げられている。どぶねずみの言い分に、「ききんこのかたは、こめをとぎこぼす御方もなく、またあらひながしは、ざるのみそこしにため、いぬにくはせ候へば、」とあり、飢饉の時であることがほめかされている。さらに、鼠の言い分には、「近年御当地は大方米は百文貳百文くらいづつ御もとめなされ候へば、落ちこぼれ一切無之」<sup>28</sup>とあり、米を少しずつ購入している様子が見える。

これらの訴えは、江戸時代前期の御伽草子、『猫のさうし』や『薬師通夜物語』における鼠の訴えと同様の表現である。特に、飢饉により、今までこぼれていた米や流しに流れていた屑がなくなってしまったことにより、鼠の食べ物なくなり、鼠が人のための食物や衣類、器物を害するようになったという鼠たちの訴えは、江戸時代前期におけるお伽草子『薬師通夜物語』や『鶏鼠物語』

に連なる表現である。

『薬師通夜物語』は、都の鼠たちの訴えに始まり、都における飢饉の状況が記され、最後には大黒天による鼠たちへの触状で終わる。冒頭で鼠たちは、飢饉のために鼠の食べるものがなく、足腰に力も入らず、猫の餌食となってしまうことを訴えている。(資料4)

#### 資料4 『薬師通夜物語』

(前略) それ近年米高値にありといへども、取分寛永十八年の春より、見れば、乞食のいづる事、羽蟻の涌がごとし、路頭に死する事、水につまる魚のごとく、(中略)、町中飢饉なれば、誰慈悲する人もなかりける、しかれば我らの眷属ねずみなどのしよくすべき物なし、櫃唐櫃をかぶらんも歯節に力なし、先年上様より洛中へ、御慈悲の御借米下され、町中に米おほくありて、鼠の一門楽々と俵のかげに住、栄花いたしつるに、今は引替洛中に俵つみをくかたもなし、あまつさへ昨日今日まで秘蔵せし猫も扶持していかげんとて、追はなしければ、猫も飢饉にのぞみ、鼠をたづねありきければ、蔵ちやうだい庭台所へ出る事もならず、天井なげしけたうつばりなどへ出といへども、四足にちからなくふるひ落、猫にとられあるひは腰脚を打むなしくなる、会者定離の習ひ、生者必滅のことはりとは知ながら、生類の中にいま我ほどくるしきものなし、いにしへはねずみの婚いりとて、果報の者と世にいはれ、かく成行事のうらめしさよ、(後略)<sup>29</sup>

『鼠共口上書』においても、『薬師通夜物語』と同様に、飢饉によって鼠の取り分がなくなったことにより困窮していることを鼠たちが訴える。申渡の中では、鼠は「どぶねずみ」「鼠」「野ねずみ」の三種類に分けられてそれぞれ申し渡しが述べられているが、鼠による口上書においては、どぶねずみと鼠のみの訴えとなっており、野鼠の訴えはみられない。都市における鼠たちの訴えとなっている。(資料5)

#### 資料5 『鼠共口上書』

どぶ鼠の義は、ぜんわんのあらひながしをゑじきにいたし、どぶにて渡世いたすべきのよし、被仰付御尤至極に候へ共、きゝんこのかたは、こめをとぎこほす御方もなく、またあらひながしはざるのみそこしにため、いぬにくはせ候へば、わたくし共のゑじきはいつこう御ざなく候二つき、いちるいものかつめいにおよび、よんどころなくせんたなまでかけのほり、いのちがけのはたらきつかまつり候、ほか鼠のぎは、たわらかますのおちほれをゑじきにいたし、やねうらものおきとうで渡世致べきのよし、御もつともなるぎに候へ共、きん年御当地は大方米は百文式百文ぐらいつ御もとめなされ候へば、わたくし共のゑじきすこしもこれなく、ひつしとこんきうにおよび、よんどころなく筆筒長持おけはちをかじり、くうふくをしをのぎ申候、

都市における鼠害の状況から、都市部に棲む鼠が対象となっている。本小冊子が殺鼠剤の広告のためのものであると考えるなら、殺鼠剤を用いる相手として、都市部の鼠が対象となっていると考えられる。

『薬師通夜物語』において、最後の鼠たちへの触状は、人の大事な物を損傷することないようにとの触となっている。もし損なうことがあれば、『鼠共口上書』と同様に、猫や鼬をけしかける旨が記される。(資料6)

#### 資料6 『薬師通夜物語』

人の秘蔵の物、大事の物。ゆめゆめかぶり喰ことあるべからず。正直ならば天よりあたへあり。非道なるねずみには。世界に五穀みちみちたりといふとも。飢饉に及ぶべし。(中略)  
このむね申つけらるべし。大黒おほえうけたまはり。鼠の惣中かくれ里の鼠。あるひは一夜の旅のねずみも此旨心得べし。若右の趣相背ねずみこれあるにおいては猫鼬に申付急度曲事にをこなはるへき者也仍如件

『鼠共口上書』が『薬師通夜物語』とは異なる点は、鼠害対策に有効なものとして大きくあげられているものが「石見銀山鼠取り薬」であることである。捕鼠器や猫による鼠の駆除は江戸時代以前より変わらないが、殺鼠剤の使用は19世紀以降の鼠害対策の特徴であるといえる。『鼠共口上書』が、鼠取り薬を商っていた吉田屋で発行されたものであるならば、鼠取り薬の効果についての広告のための発行物であったと考えられる。また、『鼠共口上書』における鼠の描写のほうが、『薬師通夜物語』よりも詳細で、鼠の種類も多く記されている。『鼠共口上書』においても、「ききんのため」という記述や、米の販売方法についての記述があり、本小冊子もまた、江戸時代後期における飢饉を背景に制作されたものであると考えられる。

鼠と飢饉とを合わせ、飢饉により鼠害がひどくなるとする表現は、江戸時代前期のお伽草子における表現と19世紀の『鼠共口上書』とは同じである。鼠に対して、飢饉時に米を害して被害を拡大するというイメージがあったといえる。また、『鼠共口上書』も、『薬師通夜物語』などのお伽草子と同様に、実際の飢饉に取材していると考えられる。米を主食とする人にとって、同様に米を食べる存在として意識されていた鼠は、飢饉時にはより注目される対象であったといえる。『鼠共口上書』の背景となった飢饉は、19世紀における天保の飢饉における江戸のような都市部の状況に取材していると考えられる。

#### 4. おわりに

江戸時代における鼠害対策には、専用の捕鼠器のほかに、手近なものを用いた拵わなが一般的に用いられていた。18世紀後半に登場した、鼠害対策に対して最も有効な殺鼠剤は、19世紀には、「石見銀山」の名称で普及し、馬喰町の地本屋が取次ぎとなり、行商により販売することで広がっていた。殺鼠剤は鼠の駆除において強力な力を発揮するものとして知られるようになった。鼠の被害が

大きくなり、殺鼠剤が鼠害対策の中でも日常的なものとなったことによるといえる。捕鼠器を仕掛け、時には殺鼠剤を用いることで鼠害対策を行なっているが、江戸時代後期には、殺鼠剤が用いられるようになった。『鼠共口上書』は、殺鼠剤の製薬所からの申渡と鼠たちからの願文からなる戯文であるが、殺鼠剤の行商を行っていた江戸馬喰町の地本屋、吉田屋小吉によって、殺鼠剤の行商の宣伝のためにつくられた小冊子であった可能性がある。殺鼠剤販売の広告の戯文が作成されるほどに、鼠害が問題となっていたことが背景にあったと考えられる。

『鼠共口上書』における訴訟と願文の形式は、江戸時代前期のお伽草子につながる表現である。飢饉に取材した物語に登場することから、鼠は、飢饉の表現において人の主食である米を害する存在として江戸時代を通して意識されていたといえる。殺鼠剤が必要な、鼠害の問題だけでなく、身近な時代に、飢饉の状況があったことも、『鼠共口上書』の作られる背景であったと考えられる。

害虫を扱った戯文「洗濯所より蚤虱蚊どもへ御申出の事并に蚤虱蚊のねがひ書」と、鼠を扱った戯文『鼠共口上書』は、ともに害虫、害獣の害とその対策などについて表現しているところに共通する部分がある。人体を脅かす蚤や虱、蚊と、身の回りのものを害する鼠に対して、人の生活の中で害を及ぼすものとして、同様の動物観があったと考えられる。また、これらの戯文が成立したと考えられる19世紀において、虫害や鼠害がひどかったことや防虫、防鼠対策への意識も強くなっていたことがうかがえる。一方で、鼠は、害虫と異なり、害をもたらすのみの存在とは意識されていなかった。富貴をもたらす存在として意識されていたことに、江戸時代の都市における鼠に対する動物観の特徴がある。

## 注

- 1 日本衛生動物学会殺虫剤研究班（1993）日本の衛生害虫防除史—日本衛生動物学会50周年記念事業展示から—、衛生動物44（1）、53-62。
- 2 瀬戸口明久（2005）害虫の誕生—虫からみた日本史—、ちくま書房。
- 3 本論において、鼠は、動物のネズミの総称のみを指していないため、「鼠」と表記する。「どぶねずみ」についても実際のドブネズミのみを指さない。
- 4 東京都立図書館蔵。都中央誌料 [444-18M]
- 5 三浦億人（2008）お伽草子『猫の草紙』論、成蹊國文41、36-52。
- 6 小林三和・富安郁子（2010）『東勝寺鼠物語』等に見る室町期僧房の食生活—その1、帝塚山大学現代生活学部紀要6、9-18。
- 7 三浦億人（2004）お伽草子『鶏鼠物語』論、立教大学日本文学論叢4、75-95。p76。
- 8 菊池勇夫（1997）近世の飢饉、吉川弘文館、p38-40。
- 9 前芝憲一（1990）『薬師通夜物語』の意図と制作方法、立命館文学515、32-48。p38-40。
- 10 三浦（2008）前掲。
- 11 徳田和夫（2009）ハーバード大学付属美術館蔵 白描『鼠の草紙絵巻』について、学習院女子大学紀要11、55-70。に、詳しく紹介されている。

- 12 中野三敏他校注（1993）寝惚先生文集 狂歌才蔵集 四方のあか、新日本古典文学大系84、p262-263。
- 13 『絵本加賀御伽』は、大坂、京、江戸の名所を描いた長谷川光信の挿絵に、栗柯亭木端（1710-1773）の狂歌が添えられた、狂歌絵本である。
- 14 小谷成子（1997）翻刻と解題『糊屋大臣晴徳太子洗濯大合戦』・『銀山御薬種より鼠共へ御申出之事并に鼠仲間より願ひ出る事』、愛知県立大学文学部論集国文学科編46、1-7。
- 15 岡雅彦編著（1988）伝承文学資料集14：近世咄本集、三弥井書店、p 3。
- 16 小谷前掲、p 2。
- 17 板垣俊一（2009）幕末江戸の唄本屋—吉田屋小吉が発行した唄本について—、県立新潟女子短期大学研究紀要、1-19。
- 18 井上隆明（1998）改訂増補 近世書林板元総覧、日本書誌学大系76、青裳堂書店。
- 19 鈴木俊幸（2010）絵双紙屋 江戸の浮世絵ショップ、平凡社、p143-144。
- 20 西沢爽（1990）日本近代歌謡史 上、桜風社、p493。
- 21 船越政一郎編纂校訂（1928）浪速叢書第5、浪速叢書刊行会、p173-178。
- 22 小浜市史編纂委員会編（1987）『小浜市史』諸家文書編四、421-424。  
隼田嘉彦（1993）戯れ文について、文教國文学30、269-281。に類似の写本が紹介されている。  
内容のやや異なるものとして、若林喜三郎（1984）三虫御縮りの書、日本歴史437、43-45。に紹介されている「三虫御縮方御書立之事」、「三虫御書立御請書之事」がある。
- 23 若林（1984）に紹介されている能登の肝煎堀内惣助家文書中の写本においても同様の表現となっている。
- 24 小谷前掲、p 4。
- 25 歌川芳艶「猫ねつみどうけかつせん」や豆本『猫鼠合戦』に、鼠の旗印や着物の文様に描かれる。
- 26 安田容子（2011）江戸時代の物語における鼠の住み処～天井・どぶ・かくれ里～、動物観研究16、13-20。
- 27 安田容子（2011）江戸時代後期の物語にみる鼠に対する動物観、国際文化研究17、261-273。
- 28 小谷氏架蔵本では、「きん年御当地にては大方米をたくさんにおもとめなされず候へば、」となっており、若干の相違がみられる。
- 29 早坂淳三郎編（1914）徳川文芸類聚第一、国書刊行会、2-3。

## 図版出典

- 図1：永田生慈監修解説（1986）北斎の絵手本 五、岩崎美術社、p51。
- 図2：黒川真道編（1993）江戸風俗図絵、柏美術出版、p375。
- 図3：宇佐美英機校訂（1996）近世風俗志（一）、岩波文庫、p259。
- 図4：宇佐美英機校訂（1996）近世風俗志（一）、岩波文庫、p261。
- 図5：飯島花月抄解（1991）誹風たねふくべ・上巻、太平書屋、p265。
- 図6：東京都立図書館マイクロフィルム

